[ブーケ]

bouquet

教育芸術社

一つになった２校の校歌

江戸川区立葛西小学校・葛西中学校

＝ 特別企画 ＝

校歌に残す 子どもたちの思い出

江戸川区立葛西小学校開校140周年 葛西中学校開校75周年 合同周年記念式典（令和４年11月7日）

葛西小学校・葛西中学校では連携教育が行われています。
そのため学校行事では順番に歌われてきた２校の校歌でしたが、
統括校長の内野雅晶先生のアイディアで続けて演奏できるように編曲され、
葛西小学校開校140周年・葛西中学校開校75周年の合同記念式典で披露されました。
校歌の間奏には中学校生徒の卒業校、葛西小学校、第六葛西小学校、
二之江第三小学校（令和２年度に閉校）のメロディーが取り入れられています。
この取り組みについて、内野先生と編曲者の相馬孝洋先生にお話を伺いました。

内野雅晶（うちの まさあき） 先生

江戸川区立
葛西小学校・葛西中学校
統括校長

相馬孝洋（そうま たかひろ） 先生

東大和市立第四中学校
音楽科主任教諭

本記事の関連動画をこちらからご覧いただけます。

葛西小学校・葛西中学校合同周年記念実行委員会
「葛西小学校校歌・葛西中学校校歌　連続演奏」
https://youtu.be/WcpXLISDV4E

葛西小学校・葛西中学校合同周年記念実行委員会
「葛西小学校開校140周年 葛西中学校開校75周年
校歌連続演奏」
https://youtu.be/PICoJUbRD38

YouTube江戸川区公式チャンネル
えどがわ区民ニュース
「一つになった葛西小学校・葛西中学校の校歌」
https://youtu.be/40r-XCFt7Yk

※取材は感染症対策を講じたうえで、2023（令和５）年１月に行われたものです。
写真撮影時のみ、マスクを外しています。

連携教育の背景

── 葛西小学校・葛西中学校は連携教育をされているということですが、いつ頃から始まったのでしょうか？

内野：平成29年3月に「小中連携教育基本方針ー併設型小中学校の設置を見据えてー」が江戸川区教育委員会より示されまして、本校の連携の在り方は同年７月に決まりました。新校舎の建築期間は平成29年からの２年間で、令和元年度から小中の両学校の児童生徒が一緒に生活を始めましたが、初年度はグラウンドがなく運動会は他校で行いました。

── 内野先生は、平成30年度は葛西中学校のみの校長を務められていました。連携に向けて、大変だったことはありますか？

内野：本校は江戸川区で初めての取り組みを実施している学校です。そのため全てが手探りでの挑戦になりました。連携するまでの１年間、葛西小学校の校長と意見交換をし、私たちだけでは判断できないことを区に打診しました。質問は70〜80ぐらいにのぼりましたね。例えば、「学校のチャイムをどうするのか」。授業時間が小学校は45分、中学校は50分という違いがあるものの校舎は同じです。放送の設備は小学校と中学校のエリアで区分できるのか、さらに100パターンぐらいから選べるチャイムの音色やメロディーをどうするかなど、考えるべきことはいろいろありました。結局はノーチャイムでやっているんですけど（笑）。それから、３つずつある音楽室や理科室をどう使い分けていくのかなど、１年間かけて問題を１つずつ整理していきました。これらはハード面ですが、ソフト面でも予見できることは全て網羅して、子どもたちにとってプラスになるよう、「併設型小中学校をやってよかったね」と言えることを目標にしていました。

── そして令和元年度以降は、両校の校長を務められているのですね。内野先生が学校経営において大切にされていることを教えてください。

内野：小中で何に重きを置くかはそれぞれ異なりますが、共通するのは「学校が楽しく生活できるところであるべき」ということです。そのためには、学校にいつも音楽が存在していることも重要です。

生徒のためにできること

── この度の校歌の取り組みについては、内野先生が相馬先生へ編曲を依頼されました。お二人はいつ頃からお付き合いがあるのですか？

相馬：私が江戸川区立二之江中学校に赴任して２年目のときに、内野先生がいらっしゃいました。内野先生は少し離れたところから私の担任しているクラスや授業、部活動を指導している様子をみて、常に温かい励ましの声を掛けてくださっていました。今は学校こそ違いますが、いろいろ相談させていただくこともあり、いつも見守って応援してくださる存在です。

内野：二之江中学校は５年間で異動しましたから、私は相馬先生よりあとから入って先に出ました。相馬先生はいつも信念をもって、校内の音楽を活発にしてくださっていました。

── 相馬先生は生徒が演奏するための曲をご自身で作曲なさいますが、いつ頃から作曲をされているのですか？

相馬：５歳頃には何か弾いてはタイトルをつけるという、作曲の真似事のようなことをしていたようです。小学校３年生の頃には本格的に楽譜に書いて作曲を始めていましたが、大学は東京学芸大学の音楽学で入学しました。学内の作曲科の先生に頼んで曲を見ていただいているうちに転科を勧められて、２年生から作曲専攻となりました。卒業後は学校で講師をやりながら小中高向けの合唱曲や吹奏楽曲を書いていたのですが、吹奏楽の指導が楽しくなってきて、一度正規の教員として日々の指導を伴いながら部活動の指導をしてみたいと思い、教員になりました。

── 教員になってから最初に作曲されたのはいつ頃でしょうか？

相馬：二之江中学校に赴任した２年目頃から吹奏楽部のために作曲するようになりました。３年目に当時

葛西小学校・葛西中学校 正門

記念式典

校内の掲示物

屋内運動場入口

式典受付後方の掲示物

の学年主任の先生から頼まれて作曲した合唱曲『いまここ』を合唱コンクールの３年生の課題曲に設定しました。「卒業」をテーマにした内容で、歌詞は学年の先生方からいただいた言葉を私がまとめたものです。

内野：それから、学年ごとの課題曲もつくってくれましたね。生徒たちが相馬先生の曲を歌いたいと希望したのでしたよね？

相馬：そうなんです。私の曲を課題曲にするのは、私の担当学年に限られていたので、他の学年の生徒に「私たちの学年には書いてくれなかった」と言われることがあって（笑）。生徒たちのために、指導以外で私ができるのは作曲することだという思いがあります。

内野：先生のオリジナルの曲と既存の曲とでは、生徒たちの意識も違うようです。だから、その不満を解消するのに３年かかったんですよね（笑）。音楽科の先生方には子どもたちとの関係性づくりに、得意な領域やその才能を活かしてほしいなと思っています。

間奏に込められた思い

── 今回の取り組みのテーマとなったのは「校歌」ですが、先生方は校歌についてどのようにお考えですか？

内野：子どもたちには、校歌に愛着を感じてほしいです。子どもたちは校歌を選べませんけれど、校歌にはゆかりがあって、歌詞には地域の特性が盛り込まれ、子どもたちへの願いが込められています。そして、校歌とは共有する歌の最たるものではないでしょうか。林間学校で二之江中学校とご縁がある新潟の山古志村のエピソードですが、新潟県中越地震で村の中学生が孤立してしまったときに、生徒たちは自分たちの学校の校歌を歌って励まし合ったそうです。校歌は子どもたちにとって特別なものですから、大切にしたいと思っています。

相馬：音楽って、それを歌っていたとき、聴いていたときを思い出す、いわばノスタルジーがありますよね。校歌もそうで、私も自分の出身の学校の校歌を覚えていますし、そのメロディーを聴くとその当時を思い出します。私が赴任している東大和市立第四中学校の校歌は作曲家の川崎祥悦さんがつくられたすてきな校歌ですが、難しいんです。それでも音楽科の教員としては生徒たちが自信をもって歌えるように指導しなければなりません。教える側がなんとなく校歌を指導すると生徒はその姿勢を見抜いてしまうので、合唱コンクールと同じように、アーティキュレーションや強弱、フレージングに加え、身体の使い方など細やかな指導をしていく必要があると考えています。

── 今回、小学校と中学校の校歌をつなげる企画は、どのように思い付かれたのでしょうか？

内野：令和元年に小学校の校長も務めるようになって

周年キャラクター

小学校2年生「アニバーサリー フラワー」

初めての始業式でのことです。基本方針で、始業式や終業式などの儀式は小中一緒に行うことが定められていたため、屋内運動場（体育館）に小中の全校生徒が集まりました。まず小学校の校歌では、音楽の先生が伴奏をし、指揮者はいませんでした。続いて歌う中学校の校歌では、伴奏も指揮も生徒が行ったのですが、会場が広いので生徒が出てくるのに時間がかかってしまうのです。そこで、この時間を音楽で埋めることができないだろうか、と考えました。小学校の校歌のあとに、何かすてきな間奏を付けて中学校の校歌に移行できたらいいなと思ったのが最初です。本校はその年によって変化はありますが、中学校には葛西小学校の子が７割弱、第六葛西小学校の子が２割、そして１割ほどは二之江第三小学校から入学していました。二之江第三小学校の閉校が決まり、消えてしまう校歌があることを考えたとき、単純に葛西小学校と葛西中学校のメロディーをつなげるのではなくて、第六葛西小学校と二之江第三小学校の校歌のメロディーもつなげれば、３つの小学校を卒業した児童が葛西中学校の門をくぐるというストーリーも見えてくるのではないかと思い、相馬先生に相談しました。

内野雅晶先生と相馬孝洋先生

相馬：正式にご依頼をいただいたのが令和元年８月で、校歌をお送りしたのがその年の11月でしたね。

内野：令和２年６月に新校舎完成のお披露目式を計画していたのですが、新型コロナウイルスの影響で３～５月は学校が止まってしまい、実現できなかったのです。その式でこの校歌を披露する予定だったのですが、それも叶いませんでした。それでも何らかの形で発表したかったので、周年行事に合わせてお披露目できるよう、準備を進めていました。

新たな校歌への工夫

── 校歌の編曲で、どのようなことを工夫されましたか？

相馬：元の校歌の雰囲気を損なわないように、自然な流れになることを心がけました。間奏に入れる旋律も、校歌の一部ならどこでもいいというわけではありません。校歌においていちばん子どもたちの印象に残っていると思われる、「～小学校♪」という最後のところを使いたいと思いました。また子どもたちの気持ちを考えると、それぞれの校歌から引用する長さに差があるのもよくないかと思い、各校８小節ずつとしました。少し困ったのが、校歌ごとに調性が異なることです。ただし原調と変えてしまうとその曲だと感じられないのではと思い、少し無理があっても原調を活かすことにしました。一通りつないだあとは、すぐに中学校の校歌に入ることもできたのですが、そのあとに３つの小学校と葛西中学校の校歌の

記念式典での校歌の連続演奏

ピアノは２台設置されて２名の児童・生徒が演奏する

メロディーを、あえてどの校歌のどの部分か分からないように、自然な形で４小節にして足しました。私が和音を付け足した箇所もあります。これは編曲者として考えたスパイスです。

内野：この４小節の調性は原曲と違うけれど、メロディーラインとリズムは同じなのですよね。私もどの部分から使われているのか必死に探しました（笑）。

相馬：最後のコーダも原曲にはなかった部分です。元の歌詞を自分で歌いながら弾いていると、こんなに壮大な校歌になったのに、このまま終わってしまったら寂しいなと思いまして。せっかくなので、小学生と中学生全員で歌いたいと思い、全員で歌える「われら葛西」という歌詞とメロディーを付け加えてよいかお伺いして、足しました。

内野：最後の「われら葛西」はハーモニーになっています。次の収録のときには低音が活躍するメロディーをもっと前面に出せるように指導して、今よりも重厚感をもたせたいなと考えています。全曲を通して伴奏がきれいにメロディーに合うようつくり直していただいています。

なくなるものを音楽で残す

── 校歌に対して、子どもたちの反応はいかがでしたか？

内野：子どもたちはとても愛着をもってくれています。周年行事の前に、毎朝登校時刻に放送で音だけ流していたのですが、両校の校歌が流れるので、葛西小学校の児童の中には既に葛西中学校の校歌を歌える子が出てきています。閉校になった二之江第三小学校に通っていた子も、間奏に校歌が入っていることを「うれしいです！」と言っていました。それから葛西小学校には、葛西中学校を卒業した先生がいるのですが、つい中学校の校歌を口ずさんじゃっているんです。小学校の先生なのに（笑）。

相馬：子どもたちはさまざまな場面で、校歌を身近な歌として受け止めてくれているのではないかなと思います。

内野：今回の校歌のために全員そろった練習が行えたのは２回ぐらいでした。その少ない時間でも、少しでも子どもたちが気持ちを高めて歌えるように、何のために歌うのかということや、このような取り組みが学校の歴史上ないということを伝えました。子どもたちも意味のあることをやっているのだという実感をもってくれたのは確かです。

── 今回編曲された校歌は、そのあとの学校行事でも歌われているのでしょうか？

内野：はい。最近では３学期の始業式で歌ったばかりですし、今後も歌い続けていきます。現在、町村合併や少子化で学校はどんどんなくなってしまっていますよね。すると、村歌や町歌、区歌、校歌もなくなってしまう。そのような、なくなるものを音で残すということも、音楽の力だと思います。

相馬：この校歌は、何かおもしろいことをやろうというアイディアを巡らせる内野先生の魂が込められているのではないでしょうか。以前、内野先生が葛西中学校に異動されてから、二之江中学校の周年行事を見にいらした際、内野先生に私が指揮をする合唱を聴いていただきました。内野先生はその感動を情熱をもって私に伝えてくださいました。管理職の先生方は、なかなか表に感情を出すのが難しい立場ではあると思いますが、内野先生はほんとうに「心」を大切に生きていらっしゃると、そのときにあらためて強く感じました。そのような内野先生のお役に立てたのは、何よりうれしいことだと思っています。

内野：私自身、音楽の教員だった時代があるわけですが、今は子どもたちと距離の近い実践者にはなれません。学校経営という視点では間接的にできることはありますが、実践するのは現場の先生方です。自分のイメージをお伝えして、出来上がったのがこの校歌となりました。

相馬：今は難しい時代ですけれど、音楽に携わっている人間として、いちばん生徒に教えなければいけないのは「心」だと思っています。これからも内野先生から、その「心」を教えていただきたいと感じています。

上野耕平の

crossing［クロッシング］

第15回

鉄道好きすぎる音楽家 ドヴォルザーク

ネラホゼヴェス城駅

ドヴォルザークの生家

鉄道好きの音楽家としても有名なチェコの作曲家ドヴォルザーク。彼の遺した作品には、鉄道を感じずにはいられないものが沢山ある。個人的には交響曲第9番『新世界より』の第3楽章はまさに疾走する蒸気機関車と思えてならない。そんな彼の生家に行ってきた。

プラハからブルタバ（モルダウ）川沿いを進む各駅停車で40分ほど。ネラホゼヴェス城駅の目の前がドヴォルザークの生家だ。駅徒歩15秒くらいの近さだ。とても静かなところで、周囲には店も無い。

こんな家の目の前を当時最先端の技術である蒸気機関車が疾走していたら鉄道好きにならないわけがない！ どんなにワクワクしたことだろう！

文・写真：上野耕平（うえの・こうへい）

東京藝術大学器楽科卒業。第28回日本管打楽器コンクールサクソフォーン部門第1位・特別大賞（史上最年少）。2014年第6回アドルフ・サックス国際コンクール第2位。17年度第28回出光音楽賞、18年第9回岩谷時子賞奨励賞受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォーンの可能性を最大限に伝えている。The Rev Saxophone Quartet、ぱんだウインドオーケストラコンサートマスター。NHK-FM「×（かける）クラシック」の司会やテレビ「題名のない音楽会」「情熱大陸」など、メディアへの出演も多い。鉄道と車をこよなく愛し、深く追求し続けている。

Information

◇上野耕平コンサート情報はこちら。

https://uenokohei.com/concert/

（上野耕平オフィシャルサイトより）

編集部メモ

ネラホゼヴェス城駅へ行くには、チェコ鉄道の090号線（プラハ・マサリク駅〜ウースチー・ナド・ラベム駅）の約1時間に1本運行している普通列車へ乗車する。駅前には博物館になっているドヴォルザークの生家、観光地としてはネラホゼヴェス城がある。

Information

新たな音楽Webアプリケーション

「カトカトーン」が開発決定！

Webサイトで誰でも簡単にアクセスでき
GIGAスクール構想による1人1台端末の活用を強力にサポート！
新たな音楽の学びを実現します

2024年4月 公開予定

（2023年4月より試験公開）

※2023年1月24日にニュースリリースを配信いたしました。

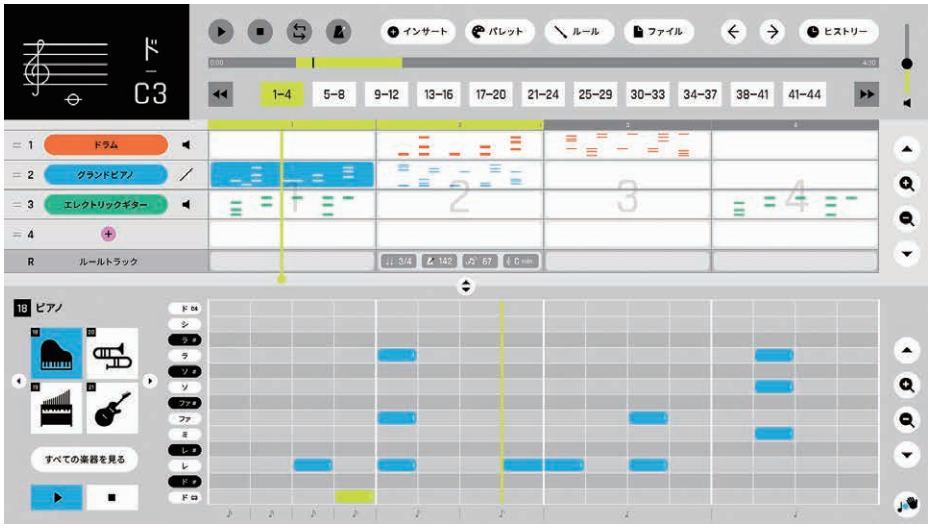
「カトカトーン」とは

「カトカトーン」は、主に小学校３年生以上を対象とした、教育現場で活用できる音楽Webアプリケーションです。初心者でも分かりやすく音楽作成ができる機能を備え、プログラミング的思考の育成につながる体験ができます。また、つくった音楽は書き出して、学習支援ソフトウェア等を通じて共有することができます。

さらに、教育芸術社発行の音楽教科書に掲載されている楽曲（一部）がプロジェクトファイルとして配布され、視覚的に分かりやすくカトカトーンのピアノロール画面に表示されることで、楽しく感覚的に楽曲の構造を分解・分析して理解することができます。

Webブラウザを通じて誰でも無料で全ての機能を利用することができるため、GIGAスクール構想で整備された１人１台のタブレット端末環境で活用でき、個別最適化された新たな音楽の学びを実現します。

※「カトカトーン」は、音符の俗称である「おたまじゃくし」の古語「蝌蚪（かと）」をモチーフにした造語です。



音楽を作成する画面のイメージ。初心者でも分かりやすく操作ができる。

「カトカトーン」開発のきっかけ

「カトカトーン」のプロジェクトは、参加各社それぞれの音楽教育に対する課題意識からスタートしました。

音楽教科書出版社として設立以来、多くの教材を発行してきた株式会社教育芸術社は「GIGAスクール構想」でICT活用が進む教育現場において、これまでもデジタル教科書やデジタル教材の開発及び発行を行って参りましたが、音楽科教育でのデジタルデバイスを使った新たな学びのより一層の展開を模索していました。

一方、株式会社ディレクションズでは、NHK Eテレで放送中の子ども向け音楽番組「ムジカ・ピッコリーノ」の演出を担当してきた石原淳平がデジタルデバイスを使って「渋谷ストリートクラフターズ」「日比谷音楽祭ぐるぐるグルーヴクラブ」などの子ども向けの音楽ワークショップを手掛ける中で、より多くの子どもに音楽の魅力を伝え音楽の裾野を広げられる方法を模索していました。

そうした両社の思いが重なり、さらに電子楽器の分野で実績のある株式会社コルグがシステム開発として参加、３社が協力して新しい音楽の学び方の可能性を提案すべく「カトカトーン」が開発されました。

音色を選ぶ画面のイメージ。多彩な楽器の音源を搭載予定。
※画面イメージは、開発中のものです。

「カトカトーン」開発チームについて

教育芸術社　DIRECTIONS　KORG

● 製作・著作・企画：株式会社教育芸術社

1948年の設立以来、音楽教科書、曲集や歌集、CD、指導資料などの学校向け音楽教材を中心に発行し続け、音楽教育の振興に貢献している出版社。

公式Webサイト https://www.kyogei.co.jp/

● 共同企画・クリエイティブディレクション：株式会社ディレクションズ

長年Eテレの番組を制作してきたノウハウを礎に、若者向けのコンテンツメイキングや企業や学術団体のコミュニケーションデザインなども手掛けるクリエイティブカンパニー。

公式Webサイト https://directions.jp/

● ソフトウェア設計・音色開発：株式会社コルグ

1963年の創業以来、一貫して電子楽器の製造に取り組み、独自の創造性と技術力を駆使した画期的な製品を世界各国で発表。2014年発売の「KORG Gadget」は、iPadを皮切りに様々なプラットフォームに展開され、音楽制作ソフトの定番となっている。

公式Webサイト https://www.korg.com/jp/

● アートディレクター：金田遼平（YES）

グラフィックデザイナー、アートディレクター。1986年神奈川県小田原市生まれ乙女座。groovisionsを経て、2019年デザインスタジオYES設立。アートコレクティブ・KMNR™、クリエイティブチーム・CEKAIメンバー。主な仕事に、『NIKE Artist Pack 22SP with Ryohei Kaneda』コラボレーションコレクション、『UNIQLO』『THE NORTH FACE』『PLEATS PLEASE by ISSEY MIYAKE』のビジュアルやキャンペーン、『蓮沼執太』の音楽作品デザイン、『RiCE』(2016-18)『BEAMS AT HOME』(2022) のブックデザイン、『天才てれびくんhello,』のテレビ番組デザイン、『ドバイ万博』日本館Chapter 2アートディレクション、『TOKYO 2020』自転車競技スタートランプデザインなど。

公式Webサイト https://kanedaryohei.com

● UIデザイン：有限会社泰地

Webサイトを企画、制作から運用、管理までトータルでプロデュースし数多くの企業HPを手掛けるウェブ制作会社。

公式Webサイト http://www.thaichi-ltd.com/

「カトカトーン」について、詳しくはウェブサイトをご覧ください。

https://www.kyogei.co.jp/katokatone/

One day, one moment

［ワンデー ワンモーメント］

フォトエッセイ

写真・文：ヒダキトモコ
Photo・Text：Tomoko Hidaki

17枚目

瀬戸内の朝

瀬戸内海の穏やかさに心を惹かれる。昔、初めて広島へ一人旅をした。江田島へ向かうフェリーを待つ間、足元にひたひたと寄せる穏やかな波音と、その優しい煌（きら）めきに驚いたのを覚えている。湘南の海とも全然違う。当時、多忙で疲れていたこともあり、その波音の穏やかさに包まれ、心が解（ほぐ）れていくようだった。

この一枚は去年、久々に訪れた広島の朝の海の煌めき。早朝一番、一隻の漁船がゆっくりと美しい弧を描いていく。この後、みるみるうちに日は昇り、空も海もぽっかりと明るい水色へと変化していくのだ。その前の、懐かしいような色合いは、変化の途中にある一瞬の美しさ。普段撮影しているもの全て、そんな名残惜しさを追いかけているのかもしれない。

ヒダキトモコ

フォトグラファー。日本写真家協会（JPS）、日本舞台写真家協会（JSPS）会員。米国で幼少期を過ごす。慶應義塾大学法学部卒業。人物写真とステージフォトを中心に撮影。ジャケット写真、雑誌の表紙・グラビア、各種舞台・音楽祭のオフィシャル・フォトグラファー。官公庁や経済界の撮影も多数。

https://hidaki.weebly.com　Instagram：tomokohidaki_1,2,3

Contents

04 ［特別企画］校歌に残す 子どもたちの思い出～江戸川区立葛西小学校・葛西中学校（内野雅晶・相馬孝洋）

09 ［連載］crossing 第15回 上野耕平

10 ［Information］新たな音楽Webアプリケーション「カトカトーン」が開発決定！

14 ［連載］フォトエッセイ One day, one moment 17枚目 ヒダキトモコ

編集後記

『bouquet［ブーケ］』No.17をご清覧いただき、ありがとうございます。
今回訪れた東京都江戸川区の葛西小学校・葛西中学校では、
広い敷地にある大きな校舎の中で、児童生徒が学んでいます。
冷え込んだ日にもかかわらず、元気よく過ごす子どもたちを目にし、新たに編曲された校歌が
これからも歌い継がれていくことをうれしく感じた取材となりました。
Informationでは、教育芸術社が開発する
音楽Webアプリケーション「カトカトーン」についてご紹介いたします。
対象は主に小学校３年生以上で、1人1台のタブレット端末環境で活用でき、
初心者でも分かりやすく音楽作成ができる機能を備えています。
お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力賜りました全ての方に、
心より厚く御礼申し上げます。

staff

Art Direction＆Design（表紙・本文）：中澤美羽
DTP：清新社　/　印刷：新日本印刷
製本：ヤマナカ製本

No.17

https://www.kyogei.co.jp/

bouquet［ブーケ］ 発行者：株式会社 教育芸術社（代表者 市川かおり） 〒171-0051 東京都豊島区長崎1-12-14
Tel. 03-3957-1175（代） Fax. 03-3957-1174

©2023 by KYOGEI Music Publishers. Ⓟ-23 本書を無断で複写・複製することは著作権法で禁じられています。